

◎5月に60人70人集まる同窓会がある。今年の幹事さんから、「77歳 喜寿の会 元気なやつを選び出した 元気な話をしてくれ」と言われた。それで、去年の職務質問の話を、セリフ寸劇にして、皆さんにも元気のお裾分けになればと、その台本を書いている。

◎2022年12月10日小学生がぞろぞろ下校をしていた時間なので午後3時頃か。場所は茨木市内を南北に貫き、バスやトラックが通る幅の広い道路、その歩道の上のことである。オレは日々の日課で、その道路の歩道を通って安威川河川敷に運動に行く途中だった。左の方をトラックや乗用車に交じって、パトカーが追い抜いていくのを視線に入れながら、前を見て、ぼろ自転車のペダルをホロリホロリと漕いでいた。

キキッキという感じで、パトカーが右折して前方20メートルぐらい先で、歩道を塞ぐかっこうで止まった。

☆オレ：「あれれ 乱暴な運転だな 小学生がぞろぞろ向かってきているのに」

◎40歳代ぐらいの警官がパトカーから飛び出してきて、こっちに向かって小走りにやってくる。その後ろから新人警官もやってくる。

☆オレ「え オレか オレのことか 又かいね」

☆小学生A「あのじいちゃん どろぼうかな」

☆小学生B「あのジジイなら うちの父さんなら ボコボコにするぞ」

☆小学生C「手錠かけないかな ピストル出して 撃ち殺さないかな」

◎ベテラン警官が、岡村に言う。

☆警官：「自転車 カゴがないじゃないの なんて えええ〜ん」

☆オレ：「・・・」

☆警官：「この自転車 どうした 誰の えええ〜ん」

☆オレ：「きみ なあ オレ 60歳過ぎてから 警察に聞かれるの これで 5回目だよ・・・」

☆警官：「名前は 姓名は 自転車 どこで買った えええ〜ん」

☆オレ：「オカムラ という 自転車かった店はもう つぶれたよ なんべんも ええかげんにしてよ・・・」

◎若い警官がスマホで写真を撮った 多分、本部に連絡して 自転車の登録を見てベテランに名前が合ってることを 合図たようだ ベテランの態度が ゴロツと変わった。

☆警官：「いやあ わたしら よそからきた パトロールなもんで 失礼しました」

☆オレ：「・・・」

◎岡村コメント：5回目、これは、「わろてな しょうない」「しかし オレ そんなに 怪しいかな」「実直な 気弱い ジジイだけど なあ・・・」単車のポリさんが3回、パトカーが2回目である。

◎元検事のFさんのコメント：

たびたび職務質問を受けて、大変でしたね。今回の職務質問の理由は、

- ① 小学生の下校時の時間帯であったこと
- ② 元気そうな初老の男が一人で自転車に乗っていたこと
- ③ 風貌が普通ではなかったこと
- ④ 過去に当該地域で痴漢事案が発生していること
- ⑤ パトカーの警察官は緊急の用務を帯びていなかったこと、
- ⑥ 職務熱心な警察官だったこと

現在、警察では何か事件が起こると、事前に予防できなかつたのかと警察官の不作為が問題とされます。

いずれにしろ、岡村氏はそれだけ元気にみられたのですから、前向きに捉えてはいかがですか。よぼよぼの老人には職務質問はしませんよ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎弟のヲケが 兄から先にと譲られ、大君になった。父の骨を探し出し、父が殺されてすぐに逃げる途中に、食料を奪った猪飼いを征伐した。

◎大君は、もうひとり、父を殺したオホハツセの大君を深く恨んでおっての、いつの日か父の御霊に報いなければと思うておった。それで、そのオホハツセの大君の御陵を壊そうと思うて人を遣わそうとした時に、まことの兄のオケが言うた。

「この御陵（みはか）を壊すのは、他の人を遣わすべきではありません。もっぱらわたしが一人で出かけて、大君のお心の通りに壊してまいりましょう」

◎そこで、兄のオケはみずから河内の多治比に下り行き、その御陵の傍らを少しばかり掘るとの、そのまま宮に帰った。すると大君は、兄のオケがあまりに早く帰ったのを怪しみ、「いかに壊されたのですか」問うた。

「土を少しばかり掘り返しました」大君が、

「父の仇に報いようと思えば、ことごとく壊してしまうはずなのに、どうして・・・」

「そうしたわけは、父の恨みを晴らすために、オオハツセの大君の霊（みたま）に報いを示そうと思うのは、まことに理にかなっています。しかしながら・・・われらと血のつながった叔父なのです。また、天の下を治めたもうた大君でもあります。御陵をすっかり壊したなら、後の世の人々がわれらの振る舞いを誹り（そしり）あざ笑うことでしょう。御陵を少しだけ掘り返すことで、すでにもう、この辱めだけで足りるでしょう」

「そなたの振る舞いは、まことに理にかなっています。お言葉の通りでいいでしょう」

◎弟のヲケの大君が亡くなったのは、三十あまり八歳（みそとせあまりやとせ）での、天の下を治めたのは八歳。

その御陵は、片岡の石坏（いしつき：香芝市）の岡の上にある。

◎オケとヲケ：現代では同じ発音だが：仁徳の長男である、履中の長男、オシハの子ども。履中のあとはその弟の、反正、その妹の允恭、その子の雄略（オケたちの父オシハを殺した）、その子の清寧からオケ、ヲケに。

◎ 弟のヲケの大君の兄のオケは、石上の広高の宮に坐して、天の下を治めたもうた。二人の妻に七柱の御子があり、その中で、ヲハツセノワカサザキが大君の後を継いだ。

◎ 先生：オケは、履中の孫で、仁賢天皇のこと。この天皇の事績が何も語られていない。弟のヲケには子がなく、兄のオケには事績がないということを考えると、ひとりの人物で兄弟を語った、架空の話では・・・。

◎オケの大君の御子のひとりが後を継いで大君になった：ヲハツセノワカサザキは、長谷（はつせ）の列木（なみき）の宮に坐して天の下を治めたもうたこと八歳（やとせ）じゃった。この大君に御子はない。御陵は片岡の石坏（いわつき）の岡にある。

◎大君が亡くなって、日継ぎを受け継ぐ御子がなかった。それで、ホムダの大君の五世の孫（いつつぎのひこ）であった、ヲホドを、近淡海（ちかつおうみ）の国から迎え、オケの大君の姫御子タシラカと結ばせ（入り婿という形で、異例の日継ぎ）、天の下をヲホドに授け委ねたのだ。

◎日本書記：ヲホド：継体天皇：大伴金村が中心となって、越前の国の三国（福井県坂井郡）にいたヲホドを河内の国の楠葉の宮に迎え、皇位に就くことを懇願し、仁賢天皇の娘タシラカを皇后として天皇となり、山城の筒城（つづき：綴喜郡）、次に、弟国（長岡京の向日市）、次に、倭の磐余（いわれ：橿原市）の玉穂の宮へ。歴史的には6世紀初頭に実在した天皇と考えられるが、継体天皇の即位に関しては、河内王朝の断絶による、王朝交替と見る見解が強い。タシカラという皇女を間に立てれば、前王朝の血統は受け継がれることとなり、まったくの断絶とはいえず、男系による天皇の継承ということではここから、別の王朝が開始される。5世紀後半の後継者争いの果て行き着いた苦肉の方策だとみなせばいい。

来廊御礼

◎オレねえ、ここの会場が好きなんですよ。こじんまりしているけれど、白い壁、高い天井、石の床、そんな空間がオレの絵を迎えてくれるというか、ほほ笑んでくれるというか、子どもっぽい表現かもしれないけれど、ま、相性がいいんだ。この建物の前にある緑道もじつにいい。オレが十歳代で茨木に引っ越してきたころは、両側が土手で、その中を小川が流れていた。小川と言ってもある程度のりっぱな水の流れがあった。その川を埋め戻して、一部を道路に、その残りに、太い残りに、木を植え散歩道を造った、この木々の植わった道がいい。この館の難点は市の中心部から少し離れ、人の往来が少ないことかな。

◎コロナ禍が始まってもう三年が経った。三年前の春に、あと一週間で展覧会が始まるという時に「ケタイな伝染病が流行り出した」「なんだか世間が騒がしい」「ヨーロッパやアメリカで 大騒ぎをしているらしい たくさんの人が死んでいるらしい」というようなニュースが伝わり、「展覧会ぐらいはできるだろう」とタカをくくっていたが、「人が集まる場所で コロナ菌が伝染しているらしい 簡単にうつるらしい 人から人にうつるらしい」と日本でも騒がれた。「オレの展覧会で 感染者が増えるなんてことになれば・・・」さほどの大人数が集まるわけではないけれど、これでは展覧会はできない、無理だと判断して、案内状に“中止”の貼り紙つけて皆さんに郵送した。最初の一年目は、「展覧会が無いと 迫力がでない」二三年経つと、「展覧会がなくても 絵が描ける 騒がしくなくていい 静かに描ける」と思うようになってきた。

◎まる三年、機嫌よく絵を描いていた、たくさん描けた。「さて どの絵を出品するか」「今回は赤い絵を中心に考えてみよう」時々、“ぼやき”コーナーに書いているが、オレの絵具箱には、20 ぐらいの色数が入っている。赤・青・緑・黄といった色が三四色づつぐらい、それと黒と白である。黄色をメインとした絵はないね、黄色はワンポイントに、ちょっとした飾りによく使う。赤・青・緑がメインの絵具で、このどれかを太い筆で、ぼっさり描く、そしてまた、ぼっさり塗る、そしてまた、ぼっさり走らせる。

◎「よし 今回の展覧会は 赤い絵を中心に飾ろう」と決め、在庫の絵を奥から引っ張り出し並べた。オレは絵を描き終わると、木枠からキャンバスを剥がし丸めて保管している。絵の写真撮影はその都度できているが、画像だけでは絵そのものがわからない、大きさがわからない、描いた本人が言うのだから・・・。絵画の複写画像では、実物の絵の表現はできない、わからない、という言葉に尽きる。とまあ、能書きは別にして、丸めて置いてあるキャンバスを次々広げてみた。「これとこれを こうならば 追加で ああしてみよう こうしてみよう」と頭の中で巡らせた。画廊の壁はあまり大きくない、いささか小さい画廊だ、とはいえ、仕事場で絵を広げたぐらいでは、画廊に並べたその時の感覚がこれまたわからない。図面を出し、寸法通りに絵を図面の上に並べたりして、「これとこれを 出品するか」ということになる。

◎赤色の話。どの赤色が好きだと聞かれたら、そうあのまっかっか、と答えるが、言葉ではなかなか伝わらない。黄色が混じった赤色、青色が混じった赤色、黒色が混じった赤色、これでは、説明しきれていないとわかってるが、これらの色が隣り合って、せめぎ合って、仲良くし合って、いい絵になるのだとごまかしておく。

◎青色の話。最近ウルトラマリーンという青色に凝っている。この色は、フェルメールで有名な青色、当時は高価な宝石：ラピスラズリを砕いてキャンバスに塗り付けていたが、現代では化学が色を作ってくれるらしいので、安く買える。

◎緑色の話。この色は樹々の葉っぱの色、どこに行っても緑色には困らない。しかもあらゆる階層の緑色、若葉色から、夏の葉っぱ、透き通った緑色から濁ったもの、光ったもの、うぶげの生えた緑色、たくさんあるけど、オレが使いこなせるのは、3色、4色ぐらいかな。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オケは 24 代仁賢天皇のこと。七柱の子を産み、ヲハツセノワカサザキ：25 代武烈が大君の後を継いだ。この天皇は、オホハツセワカタケル：雄略とオホサザキ：仁徳とを合わせたような名前を持っている。どちらも、5 世紀の河内王朝の代表的な大君であった。そしてこの 25 代武烈が、河内王朝にとって事実上最後の大君であった。次に即位するのが、ヲホド：継体である。

◎日本書記：戦後の出版物では削除されていたのがこれらである。武烈天皇は日本書記では暴虐非道な天皇として、異常な行動の数々が語られている。

妊婦の腹を裂いて退治を引き出し眺めていた。

人の爪を抜いて、山芋を掘らせた。

頭髮の毛を抜いて木に登らせ、木を切り倒して殺した。

女を裸にして、目の前で馬と交わらせた。

池の樋に人を落とし、ホコという諸刃の武器で刺し殺した。

◎ネット情報：10 歳で即位、18 歳で亡くなっている。この悪行は、古事記には記載されていない

◎さて、いよいよ最終段階、ヲホド：継体天皇が表れる。

◎ヲホド、ホムラの大君の五世（いつつぎ）の孫は、伊波礼（いわれ）の玉穂の宮に坐して、天の下を治めたもうた。この大君の御子たちは、みなで十あまり八柱（十八）だった。この御子たちの中で、アメクニオシハルキヒロニハが天の下を治めたもうた。

ヲホドの大君の御年（みとし）は四十あまり三歳（よそとせあまりみとせ）での、丁未（ひのとのひつじ）の年四月（うずき）九日に亡くなった。御陵は、三島の藍の御陵じゃ。

◎古事記ではこのあとそれぞれの御子が兄弟があとを継ぎ、宮を構えたことが列挙され、古事記は終わる。

◎この列挙の中に聖徳太子が出てくる。ウマヤトノトヨトミミ、原文では、「上宮之厩戸豊聡耳命」古事記ではこの名前が載っているだけである。

◎聖徳太子の伝説がなぜ生まれたのか。日本書紀に聖徳太子のことが載っている。聖徳太子は女帝の推古の子、摂政として政治を補佐した。伝説は五つ載っている。1) 母：推古天皇が宮中の厩の戸にあたった時に安産で生まれた。2) 生まれながらに話すことができ、聖人の智を持っていた。3) 耳がよく、成人後は、十人の訴えを同時に聞くことができた。4) 未来のことが預言できた。5) 父の用明天皇に寵愛され、幼少期は特別に上宮（斑鳩宮）と呼ばれる宮殿に住まわされた。

◎日本書紀：538 年朝鮮半島の百済の国からの使者が、海を越え、大和朝廷に仏教の経典や仏像を運んできた。

◎この法は諸の法の中に最も殊勝たり。解（さと）り難く入り難し。周公・孔子も尚知りたまうことかなわず。この法はよく量もなく、辺もなき福德果報を生じ、すなわちすぐれたる菩提を成弁す。

◎百済の聖明王が、仏教をこういい、手紙を読んだ欽明天皇が、躍り上がるほどに喜び、こういった。

◎われ昔よりこの方、いまだかつてかくの如き、くわしき法を聞くこと、えず

◎当時、仏教擁護派の蘇我氏、と仏教反対派の物部氏。

◎聖徳大使：教科書には年号入りでこと細かに聖徳大使の偉業が載せてあったのをわざわざ覚えさせられた。戦後半世紀ぐらいから、あれは嘘だの疑わしいだの、あれは脚色だったと、歴史の話が崩れ出した。実在の人物のようだが、明治以降の国民洗脳教育がつい最近まで生きていたとは、驚きというより、戸惑っている。

- ◎5:30 車で出発。もう空が明るくなってきている。しばらく走っていると、東に向かって、京都に向かって、「あれれ 太陽じゃないのかな ぼわ〜 と あんどんのような 大きなオレンジ色がぼやけている」
- ◎7:30 歩き始めた。朝飯の時間がもったいないので、車の中でパンと果物とチーズなどをモグモグ喰った。明王院というお寺、なかなか風格のある建物、古刹というのかな、その間をぬって登り始める。最初の一本目は無理をせずこまめに休憩を取った方がいい、と言い聞かせつつ、ノンストップで進んでしまい、しばらくして、「ああ しんど」となってしまう。今日はちょっとした斜面だけれど 40 分で腰をおろした。腹は大量の朝飯でまだ満腹である。
- ◎地面は乾いている、褐色系の土や岩の上に、あれ一枚、もう一枚、桜の花びらがまばらに散っている。これはなかなか風流じゃないか、えんやこらしよ。このコースを歩いていると、時々、眼下に葛川が見える。
- ◎朝、運転しながら日が眩しかったが、滋賀県に入ると空模様がどんよりしてきた。「予報では晴れの予定だったが・・・」登りながら、「まさか 降らないだろうね・・・」風も冷たい。そうそう話は飛んで帽子の話。髪の毛が無くなり、頭が寒いと感じる。冬は防寒帽子が離せない、山でも、枝で引っかくと怪我するやら痛いやら。それで今日被ってきたのがややつばの広い帽子、これを被って河原を走るとお陽さんが隠れ快適な風が来てなかなかお気に入りです。ところが今日は、風が冷たい、耳が痛い、ヤッケのフードを帽子の上から被り寒さ対策、「そんな大げさな」という声上がるかも知れないが、しばらく前の雪が残っていた時より寒い。
- ◎一本登ったところ、平らなところでストレッチ体操をした。オレは最近まで、山で筋肉が攣ったことがなかったが、澤山さんがよく痛がっていた。ツムラ漢方薬の 68 番が、攣りに効くとたくさんもらっていたが、今調べると 1 個しか残っていない、山で皆さんに配ってしまったのかな。そんなこんなで、いつも河原で 15 分ほどしているストレッチを試してみた。しこを踏み、股覗きをし、野球のキャッチャースタイルをし、手を上に挙げ、左右に倒し、それでも 10 分もできない、そそくさと終わったが、それでも気持ちがいい。
- ◎このコースには、夏道と冬道がある。そういえばここは冬に登ったことがなかったが、夏道はトラバースと谷筋、あのトラバースに雪が積もればいささか怖いね、急なスキー場になるね。冬道は尾根を歩くので雪には強いが面白みに欠ける。今日はこの谷筋の景色を楽しみにしていたが、葉っぱが出そろわない今、いささか頼りない、面白くない、と思いながら右に曲がる場所を見失ってまっすぐ歩いていた。「あれれ間違った」スマホを出して地図を見ると、少し後ろで右折しなければならぬようになっているが、今進んでいるならかな道もしばらく行くと、上の道と合流しそうなので道なき道をまっすぐ進んだ。おおなんと冬道に合流、そこを右に曲がると、夏道と冬道の分岐の三俣があった。帰りは夏道を帰ったが、オレが間違ったところまでけっこう距離があるような気がした。スマホの地図には、冬道のルートが書かれていない。
- ◎10 時前に御殿山に着き一本。5 年ほど前にも単独でこのコースを歩いているが、その時は夏道を歩きながら、しんどいコースだとぼやいていたのを思い出す。今日は身体が軽い、元気である、しかしバランス感覚が悪いね、急な下りは三点確保で歩いている。御殿山からてっぺんがよく見える、ここらあたりから木が無くなり、てっぺんまでのルートがまる見え、ゴマ粒のような人影もふたつ動いている。
- ◎てっぺんまで 45 分だそうだ、ひよろり背丈ぐらいの木がまばらにある中、風が吹く、エンヤコラどっこいしょ、素晴らしい景色だ、360 度まる見え、いいねえ。千メートル足らずの山々が連なるポコリンぽこりんだ。
- ◎11 時前の着いた、「早いが メシだ 腹が減った 風がきつい 寒い」ザックからシャツを出して着込んだ。
- ◎なんていう花かな、調べると“ショウジョウバカマ”が近いような気がする、大きさはコインぐらいの淡い紫ピンクの棒状でラッパ状の花びら、10 か所ぐらい見られた。イワカガミの葉がキラリ光っているぞと思っていたが、陽の当たる一か所で咲きかけた花を見つけた。蕾は赤が目立つ、もっと白っぽいピンクの花だが・・・。もう一つあっちゃこっちゃんに薄いブルーの小さい花、スミレかなと思うが、ごめんね、気にも留めなかった。
- ◎2 時前に車のところに下ってきた。車の後ろを開け、コンロに火を点け、湯を沸かしインスタントコーヒーをたっぷり、残ったサンドイッチも喰った。往路は 2 時間弱、復路も下道、2 時間強かった。

染殿后為天宮被嬖乱語第七くそめどののきさきてんぐのためにねうらんせらるること>

◎今は昔、染殿ノ后ト申すは、文徳天皇ノ御母也。…形チ美麗ナル事、殊ニ微妙（ことにめでた）カリケル。而ルニ（しかるに）、此后常ニ物ノ氣ニ煩ヒ給ケレバ、様々ノ御祈共有ケリ。

◎染殿：藤原明子：染殿邸内に住んでいたことからの称。母は嵯峨天皇皇女。関白太政大臣良房公の御娘でいらっしやる。容姿の美しさは格別でおありになった。だがこの后、常に物の怪にお悩みになっていたので、様々な祈禱が行われた。そして、特に靈驗著しいと評判の僧を召し、あれこれ修法を行ったが、その験が無い。

◎大和の国葛城山の頂上、金剛山に尊い聖人が住んでいた。修業を積み、鉢や瓶を飛ばして食物を持ってこさせたり、水をくませたりしていた。天皇と、後の父の大臣が、その評判を聞き、僧に染殿の病気の祈禱をさせようと、何度も参内するよう使いを出したが辞退していた。だが勅命に背きがたくついに参内することになった。

◎さて、御前に召して加持をさせたところ、後の侍女のひとりがにわかに狂いだし泣きわめき、女の懐から一匹の老狐が飛び出した。後の病は治った。父の大臣は喜び、聖人にしばらく逗留するように仰せになった。

◎さあここからが面白い。夏の日、后が単衣の着物だけを着ていたが、さっと風が吹いて几帳の垂れ布が翻ったその瞬間、聖人は後の姿をかいま見た。聖人は素晴らしい美人を見て、目も眩み、肝も砕け、后に対して深い愛欲の情が生じた。単衣の着物：調べると袷に比べ裏地の無い着物で見ためは同じだそう。着物姿の美人を見て、かほど欲情を覚えるのかな。書いてははいないけれど、どこかの部位をチラリズムで見たのだと解釈しよう。オレなら、膝から下がめくれ上がったとか、袖口から腕の奥の方が見えたとか・・着物だもんね。

◎聖人はひとりで悩んでいたが、ついに思慮を失い、すきを窺い、ふせっておられた後の腰に抱きついた。后ははっとして抗うが、聖人もあらん限りの力で抱きついた。大騒ぎになり聖人は捕らえられ牢につながれた。聖人は牢獄の中で、「わしは直ちに死んで鬼となり 后と情を通じる」と宣言したのを聞いた大臣と天皇は、聖人を放免して山に帰した。山に帰った聖人は后が忘れられず、「死んで鬼になって 后と・・」そのまま断食をして死んでしまった。するとたちまち聖人が鬼の姿になった。

◎物を不食ザリケレバ、十余日ヲ経テ、飢ヘ死ニケリ。其後忽（たちまち）鬼ト成ヌ。其形、身裸ニシテ、頭ハ秃成（かぶろなり：当時の鬼のおかっぱ頭）。長（たけ）八尺許ニシテ、膚ノ黒キ事漆ヲ塗レルガ如シ。目ハ錠（かなまり：鉄の椀：眼光鋭い恐ろしさ）ヲ入タルガ如クシテ、口広ク開テ、劔ノ如クナル齒生タリ（はひいたり）上下ニ牙ヲ食ヒ出シタリ（いだしたり）。赤キ裕衣（たふさぎ：ふんどし）ヲ搔テ（かきて）、槌ヲ腰ニ差シタリ。此鬼俄ニ后ノ御ます（おはします）御几帳ノ喬ニ（そばに）立タリ（たちたり）。人現ハニ（ひとあらはに）此レヲ見テ、皆魂ヲ失ヒ心ヲ迷ハシテ（まどはして）倒レ迷テ逃ヌ。女房ナドハ此レヲ見テ、或は絶入り、或は衣ヲ被テ（かつぎて）臥ヌ（ふしぬ）。疎キ人ハ参リ不入ヌ所ナレバ不見ズ。

而ル（しかる）間、此ノ鬼魂后ヲ悦ラシ（ほらし）狂ハシ奉（たてまつり）ケレバ、后糸吉ク（いとよく）取りつくろい給テ、・・

◎おかっぱ頭、身の丈八尺、裸で黒い肌、でかい目に牙、赤フンの鬼が後の几帳の傍に立った。人々は驚き慌て逃げまどったが、后はにっこりして鬼と二人でお臥せになった。鬼は、「本当に恋しかった」と語り、后も嬉しそうに聞く日々が続いた。これを聞いた大臣と天皇は、鬼退治の祈禱を重ねたら、しばらく鬼は現れなかった。三か月ほど鬼の姿も見えず、后も平穩に戻り、天皇は文武百官を従えて、後のもとにやってきた。后と天皇が感慨深く以前のように話していると、突然鬼が表れ、後の几帳の中に入った。后もいそいそと几帳の中に入った。鬼と后は皆の見ていない前で、言いようもない見苦しいことを、はばかりなくおこないなされた。

鬼と后が、人前でポルノまがいのことをした、ほほほ、である。

◎話はこれで終わり、教訓として、高貴な女性はこのような法師に近づいてはいけない、という。

◎安威川河川敷、走りながら思うことをICレコーダーで取っている。「しみじみと 76歳か 最近まわりの連中 元気がない というより みなさん 肉体が 減びつつ 壊れつつ これが なんだか急に来たねえ」

2月に亡くなった同年の友、医者だった。奥さんによると、「最後まで 煙草を くゆらせながら亡くなった 」と聞いた。彼の場合は、ピースの缶カンだったそうだ。オレも若いころは吸っていた、いまだに医者がレントゲン写真を見ながら、「汚い 肺だ」とおぬかしである。ピースは当時も高級煙草で、あれにはあまり手を出さなかったが、何度か買ったことがある。ペコりとふたを開けると、ふわり渋い香りが漂い、「あれがたまらん」という人もいるくらいである。青色、濃い青色、青に紫と黒をほどよく垂らした濃い青色、そこに金色のツバメが描かれていた。いいデザインだ。聞いた話では、戦後すぐにアメリカのデザイナーに依頼したとか、オレと同じ年月を過ごしているデザインかな。調べるとデザイン料は150万円だったらしい。

もうひとりの同年の友、4.5年前からパーキンソンを患い、よちよち歩きから車いすになっていったが、まだまだ気力はあると思っていたら、先の話と同じ2月に急に亡くなった。指に当て酸素を計る機械、酸素が60ぐらいたったとか。これは即入院の数字らしいが、彼もまたタバコがやめられず、入院拒否でしかも、「酸素吸入は 爆発する」とそれもかなわずなくなったそうだ。「死んでもいいか ら煙草が吸いたい」なかなかあつぱれな死に方だと感心している。酒も同様で、「酒はやめられない 豪快に生きたい 酒を飲むぞ」こういう友もまわりにいる。酒もたばこも、やめられない人がいるんだ。

65歳ぐらいの頃、渋い山にテントを担いで入った。渋い山とは、人気はないので人は少ないが入ってみるとなかなか魅力的な山だった。衣川さんがその酸素測定装置を持っていたので全員が計った。「Kさん とオレ 80しかない 即入院の数字だ」「岡村さん 普通だ なんともない」懐かしいはなしだ。

◎もう一人は同年の友、偶然にも誕生日まで一緒だった。酒の席で、オレと同時に、「おめでとうございます ありがとうございます」と自身で自分の誕生日を祝う声を上げる奴がおり、「おお 同じ日やったのか」とわかった。その彼、撮り鉄で、半月ぐらい車中泊で全国を撮影にまわるほどの数寄モノ、大手建設会社の現場監督を定年なってそんなことを楽しんでいる。1年前、「まさか まさか 前立腺ガンが判明・・・」とそれ以後連絡がプツリ切れた。前立腺特異抗原 PSA という数字が21とか言っていた。オレの検査報告書にも書いてある、オレは1.3でまったくのセーフらしい。その彼から最近連絡が入り、一年間いろいろな治療を重ね、最終的には陽子線治療で数字がセーフ圏内に入ったそうで、ガンが消滅したらしい。

その話を元気な友人と話していたら、彼は50歳代に前立腺おかしくなったらしい。医者に行くと産科のような椅子に座らされ、「金玉を持て」と医者に言われ、直腸に指を入れられた。「いてて」「前立腺が 腫れてる こうして 揉んだら 楽になる・・・」「奥さんに 揉んで もらえないか・・・」「だめか それじゃ 薬しかないか・・・」「精液を 溜めたらいかん しょっちゅう 出さな 射精セント」「そんなん 言っても・・・」「手があるやろ それで出せ とにかく出せ」ということらしい。

我々の年になると、前立腺ガンが多いらしい、皆さんとにかく 出せばいいらしいぞ。

◎ぴたりと連絡が無くなったやつ、杖がなきゃ歩けないというやつ、入院や自宅療養のやつ、そんな方々が増えてきた。今までは、「〇〇 病気らしい・・・」ぐらいの話ですんでいたが、え あれも、これも、とまわりの何人かが、ぐったりしている、いっぺんに増えてきた。淋しいねエ。

◎死のはなしは考えない、気にしない、と言っているが、これも、オレのほとんどの数字がセーフの範囲内であるが故かな。少しでもおかしいことがあると、気に病み、元気がなくなり、日常が無くなっていくかもしれない。今はどんな酷な病気でも本人に告知するから、それを聞けば、「頭が真っ白になった」とか、「まさか自分が」思うらしい。今のところオレはセーフ圏内である。

- ◎朝一番に、山を同道する三宅さんから電話があり、「足が ややこしい 今日は無理」「無理したら アカンよ」ということで島上夫妻とオレの三人で武奈ヶ岳に向かう。「三宅さんがいないと ポタモチと バナナが」「朝食に バナナを控えたのに 残念」という声が聞こえる。
- ◎7時に車で出発、茨木 IC、京都東 IC、途中（地名）を経て坊村の駐車場に1時間半で着いた。「えええ 満車」やっと一台のスペースを見つけ駐車した。春の今、土日は混むが、若いご夫妻はこの日しかダメなんだ。
- ◎8:50 トイレをすませ、明王院の奥から登り始める。風が強い、朝、自宅庭で洗濯物を干している時に、「あれれ 今日は風だね」と思っていた。登り始めて1時間ほど、前回同様、陽よけの幅広帽子をかぶってきたが、冷たい風で耳が痛い。歩きながら、次の休憩でタオルを巻くか、フード付きのダウンを着るか、思案しながら、エンヤコラの急な斜面を歩いた。しばらく歩いて、ザックの中に雨具が入っていることに気づき、「そうだ ヤッケをはおって、フードをかぶれば 解決じゃ」と閃いた。普段ならすぐに気づくことが、はあ～はあ～言いながら筋肉に過剰の酸素が吸い取られると、頭が回らないのか、そんな簡単なことがなかなか気づかないとは、おっかしいねえ。それにしても、フードをかぶると、「おお あたたかい 快適じゃ」とグイグイ登る。ほんとうは、グイグイと言いたいのだが、ジジイ登りはよっこらしょとゆっくりの足取りである。先ほどは息ができないぐらいの強い風が吹いていた、しかも寒い。もう5月の暖かさと大阪で言っていたが、春の装いでは寒い、まだ、防寒具が欲しいぐらいだ。
- ◎昨日から、山の準備をしていたのに、IC レコーダーと、タオルハンカチを入れ忘れてきた。IC レコーダーは、「しかたがない 紙を出して メモを取るか・・・」と考えていたが、「オレはスマホを持っている あれで録音すれば いいのでは」と思いついた。2.3度録音経験はあるが、その保存・再生がわからなかった。今日は習熟した。録音が終われば保存ボタンを押せばいい、再生するにはまた、再生ボタンを押せばいい、終われば削除ボタンを押せばいい、なんと完全に使いこなせるではありませんか、と笑い。タオルハンカチは、“鼻たれ”をぬぐうのに必需品なんだ。寒いと水漬が垂れてくる、冬ならこれが凍る。寒い今日も鼻垂れジジイだが、指で手鼻をかむ、下手くその手鼻、口元や指に垂れる、それをぬぐわねば、だが今日はタオルがない、汚れたままで歩いた、木の幹で拭ったりした。
- ◎11:30 てっぺんに到着した。相変わらず風がきつい、冷たい風が吹く、とはいえこの時間になると、春の冷たさ、がまんできない寒さではない。「ちょっと下で 風のないところで 弁当を」今朝は出発が遅く時間に余裕があったので、ごはんを詰め、ベーコンと卵を入れた野菜炒めを作った。茶のはいった水筒を飲み美味しくいただいた。目の前にいるふたりの若い山ガール、コンロを点け、ひとりは鍋のラーメン、ひとりはカップヌードル、それを食べ終わって、ホットサンドメーカーを出し、太鼓饅頭を入れ、バターを出して火にかけている。けたたましい声が聞こえ、何があったのか知らないが登山とキャンプの食事を楽しんでいる。“ひろしのポッチキャンプ”というTV画像の中で、彼は、ホットサンドメーカーをフライパンがわりに上手く使っている。見たのは餃子を温めて喰うシーンだったが、生の餃子をホットサンドメーカーの上に並べ、水を垂らして薪が萌える火の上に置く。「おっとっと できたかな 美味しいじゃん」てな感じで喰っていた。
- ◎思い出したが、登山道を登りながら、「おお 前回見た桜の花びらが まだ ちょっとだけ残っている」「おおこれは こぶしの花びら ティッシュの切れ端のように土の上に」上を見上げるも、花の影も形もない。1000メートルを超えたあたりの樹々、アズキ大の若葉が萌え始めている、赤っぽく、黄色っぽく、若葉が。
- ◎下っている時、ちょっとおもしろい話。急な斜面を、オットト、滑らぬようにと慎重に歩いていたら、こぶし大の石がコロコロ転がった。オレが一步、石もコロコロ、オレが二歩、同じように石もコロコロ、オレが三歩、同じように石もコロコロ、なんと石君、ころころ五歩まで付き合ってくれた。
- ◎山の土はほとんど乾いていた。上の方の細い樹々は、風や雪と戦いねじれ曲がって立っている。下ってくると太いモミの樹がいくつも目立つ、太い松もある。下の方の太い樹々も風や雪が多いのか、たくさんの根っこをあらわに倒れている、登山道を塞いでいる、迂回路ができていて、いいねえ、山は。

或所膳部見善雄伴大納言靈語第十一<あるところぜんぶよしをのともものだいながんのりょうをみること>

◎三年も続いた、コロナ禍が終わりかけている今、今昔物語の中に疫病の話が出ている。

◎伴善雄（とものよしお：宇治拾遺物語では、とも→ばん）

◎今は昔、国中に咳病（しわぶきやみ）が大流行、上中下すべての人が病み臥した。そのころ、ある屋敷の調理人が帰宅途中、亥の刻（PM10時）赤い上着に冠を着けた、たいそう気高い恐ろしげな人に出くわした。

◎見ルニ、人ノ体ノ気高ケレバ、誰トハ不知ネドモ「下郎ニハ非ザメリ」ト思テ、突居（ついい）ルニ、此ノ人ノ伝ク、「汝チ 我レヲバ知タリヤ」ト、膳部「不知秦ズ（しりたてまつらず）ト答フレバ、此ノ人亦伝ク、「我レハ此レ 古ヘ此ノ国ニ有リシ大納言伴ノ善雄ト伝シ人也。伊豆ノ国ニ被配流テ（はいるせられて）、早く死ニキ。其レガ、行疫流行神（えやみのかみ）ト成テ有ル也。

◎行疫流行神（えやみのかみ）疫病神（やくびょうかみ）

◎わしは朝廷に対し罪を犯し、罰を被ったが、かつては国に恩を受けた。今年は、人々がたくさん死ぬほどの悪疫が蔓延するはずだったが、わしが咳病ぐらいにとどめておけと指示したのだ。だから世間で、咳病が流行っているのだ。わしはそのことをお前に伝えようと思い、ここに立っていたのだ。そなたは怖がることはない、と言ってかき消えた。調理人の男は、これを聞き、こわごわ家に帰り、人々に語り伝えた。それにしても世に人は多いのに、この調理人の男に告げたのだろう、きっと何かわけがあるのだろう、と語り伝えられている。

◎奈良平城京のゴミの遺物から、疫病退散の呪術が書かれた木簡が出ている。近代でも死亡率の高いのは、疱瘡：天然痘や、はしかです。疱瘡に罹るのはのは、疱瘡神に取り付かれることが原因だと考えられていた。

◎京都の祇園祭も、疫病退散を起源としている。疫病が流行、富士山噴火、大地震などの大災害なの、災厄の除去を祈って、当時の国の数である 66 本の鉾を造った。洛中を巡行する山鉾の装飾が華麗なほど、盛夏に蔓延する疫病を追い払えた。

◎伴大納言絵詞（ばんだいなごんえことば）源氏物語絵巻・信貴山縁起絵巻・鳥獣人物戯画、これらの、日本の四大絵巻物、国宝だそうだ。放火され炎上する応天門。無実なのに捕らえられる左大臣源信。真犯人。舎人と子供の喧嘩で真犯人の発覚。伴善雄を捕らえる検非違使の一行。

◎いつもこれらの絵巻を見ながら、もっと鮮明なものが見たい、細部のわかる物を見たいと思う。いかに国宝級のものであっても、薄暗い部屋で、ガラスケースの中に入れられ、色が剥がれ落ち、人々の手足の動きが見えない、読めない、これはほんとうに悔しい。伴大納言絵詞もネットで詳細は載っているが、残念ながら描かれた当時の半分以下に、剥がれ落ち破損している。当時の服装や人の動きや顔の表情を、もっと知りたい、見てみたい。どなたか修復のおりの下図を横に添付してくれると助かるのだが・・・。

◎宇治拾遺物語にも、<伴大納言の事>という章がある。

◎伴大納言善雄は、佐渡の国の郡司の家来である。佐渡で善雄は夢を見た。その夢は、善雄が西大寺と東大寺を跨って立っている夢だった。妻に話すと、「あなたの股が 裂かれるでしょう」と夢判断した。次に郡司に話すと、酒食でもてなし、上座に招いた。善雄は、股を裂かれるのかと、恐れをなしたが、郡司はこういった。「お前はこの上なく 高い地位に昇る夢を見たのだ 必ず高い地位に昇るが、事件が起きてその罪をかぶることになるぞ」といった。

◎死の話から、一寸先の話から、「明日はわからないね」ということから、「わからない」が飛んだ。「そらあ 先はわからん これから オレが どうなっていくのか どうもならないけれど 明日も生きているだろう 多分」と思いながら話はまた飛ぶ。学者が、「私には わかりません」「これは まだ わかりません」とおっしゃる先生方がいる。これはいいねえ。わからないという先生は信用できるが、ごまかすやつ、言い繕うやつは信用できない。学問もアートも同じだよ。

◎それで頭に浮かぶのが、「子ども科学電話相談：NHK」番組がある。この番組が好きで、ラジオが流れるままに聞いている。オレも電話で質問したいなと思うぐらいに丁寧に答えてくれる。子どもの質問、えっと驚くような奇想天外な質問には彼らも戸惑い苦笑しながら躊躇しているのはおかしい。ただ、彼ら、嬉しそうな顔をして答えているのは好感だ。てきぱき子どもが喜びそうな返事、関西弁丸出しのおっさん、優しいお姉さんと多士済々。ラジオなので顔がわからないが、「それは わからない」わからんと答えながら嬉しそうな顔が目には浮かぶ。今日もアリの専門家家で、アリの話しながら、「アリのことなら何でも聞いてくれ アリが大好き アリのここが面白い アリのあそこが面白い・・・」としゃべりだしたら話がつきない彼、「だけどねえ このとはわからないんだ、なんでなんだ どうしてなんだ」素直に自分がわからないということを話している。

◎知り合いに鳥好きがいる。80歳のかんちゃん、趣味のひとつが探鳥だ。スズメの数を定点観測する。カモを見に行く、見ただけでいくつかの種類がわかる、子どもカモの毛がわかる、発情しているカモの毛がわかる。高い空を見て、あれは・・・、これは・・・といいあてる。

◎彼に聞くと、日本で美しくさえずる3種の野鳥は、キビタキ、オオルリ、クロツグミだそう。オレはいつも知らない鳥を見かけると、帰ってパソコンで検索する。サントリーの鳥図鑑を開け、大中小、色、季節、山とか川とかを入れると、おおよそ的確に教えてくれる。しかもその泣き声まで聞かせてくれる。かんちゃんが、「その三種 鳴き声 いいでしょう」と舌なめずりしながら、そういう。「舌なめずり」の部分は想像の話だがそんな顔が目には浮かぶ。ただオレがそれらの鳴き声を聞いても、「え そんなに美しい そんなに違いがある」なんて頓珍漢な返事をしてしまう。好きであること、興味があることにのめり込んで、心うき舌なめずりは素晴らしい。山に入っても澤山さんが、「お花畑 ○○の花を見に登ろう」なんて言っていたが、「なにがお花 しょうもない オレンジのアトリエの方がずっときれいよ」「いいおっさんが お花畑だって」なんて聞こえないように嘯っていた。空で苦笑しているかな。

◎久しぶりで蛇を見た。オレが走る前方を横切る蛇、「おおお」慌て、スマホを出しスイッチを押し、カメラを探した。前を見てもういない、「えええ あれえ」と草むらに目を凝らすがいらない、「そんなばかな いるはず・・・」蛇君横のコンクリートブロックの斜面をのそり、まだ寒いのか動きが鈍い。やっと撮れた。去年一年、蛇の姿が見られなかった。毎年この安威川や山の中で、10匹ぐらいは拝見するが、まったく見られないとは不思議なことだと思っていた。去年も一度山で、「へびだ・・・」と前の方が叫び、「どれどれ」と探したが姿は拝めなかった、これが一回きりだった。今日のやつは1メートルぐらいのアオダイショウ、まだ青年かな、しっとり元気そうだった。なんと、10年以上生きるらしい、やはりあれはまだ青年だ。

◎河川敷の草、日に日に背が伸びる。ツクシが出始めたころは、たった5センチ10センチのひよろりツクシが見分けられた。それが今は背の高い草が膝ぐらいまで伸びている、まさに日々によきによきである。小さい花も咲いている、野草の花なれど、白に黄に紫に咲いているさまは気に入っている。花屋の華麗な花束ではないが、草の葉っぱの間から背を伸ばす小さい花はいいものである。オレンジ色のケシの花がパラパラもあった。一週間ぐらい前から、「ホーホケキョ」を聞く。姿は見えないが、鳴き方が日々上手になっていく。